

右方転移文の派生と情報構造*

木村宣美

0. はじめに

日本語は主要部後置型 (head-final) 言語であり, 通常, 述語が文末に生じるが, (1) に示されているように, 任意の要素が本来の位置ではなく述語に後続する位置に生じる右方転移 (right dislocation) 文がある。

- (1) a. 君は, 本当にダメだね。
b. 本当にダメだね, 君は。(久野 1978:67-68)¹

この構文は, 述語に後続する位置に置かれる転移要素が, 本来の位置から文末への右方移動 (rightward movement) が適用されて導かれる (Haraguchi (1973), Simon (1989)) と最初に分析された構文であり, 1) 動詞句前置 / 残余句移動等の左方移動 (leftward movement) によって導かれるとする「移動分析」(黒木 (2006), Fukutomi (2006)) と 2) 移動規則のみの操作で導かれるのではなく, 文の部分的繰り返しによって導かれるとする「移動と削除に基づく分析」(久野 (1978), Abe (2004), 綿貫 (2006), Yamashita (2010, 2011), Takita (2011)) を加え, この右方転移文に対して, 概略, 3種類の派生に関する分析が提案されている。

右方転移文と情報構造 (information structure) の観点で, 右方転移文の後置要素に関して, Gundel (1977/1974), 久野 (1978), Rodman (1997/1974), Huddleston and Pullum (2002) では情報構造上の旧情報 (old information) であるとの分析が提案されているが, 高見 (1995), 江口 (2000), Astruc (2004), 中川・浅尾・長屋 (2007), Nakagawa, Asao and Nagaya (2008), 綿貫 (2012) では右方転移要素が旧情

* 本稿は, 日本中部言語学会第58回定例研究会 (平成24年12月8日 静岡県立大学) において口頭発表した内容に加筆・修正を施したものである。なお, 本研究は, 平成22年度-平成24年度日本学術振興会科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) ((基盤研究 (C) 研究課題『句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係に関する理論的・実証的研究』(課題番号22520487)) に基づく研究成果の一部である。

¹ 本稿では, 述語に後続する位置に生じる要素を右方転移要素と呼び, 下線を引くことにする。また, (1b) のような文に対して, 右方転移文, 後置文, 右方転位文等の用語が用いられているが, 本稿では右方転移文という用語を用いる。なお, 右方転移との用語を用いるが, これは右方移動が関与することを主張するものではないことに注意されたい。

報を担う場合に加えて、情報構造上の新情報 (new information) である場合があることが指摘されている。これらの分析に従えば、右方転移要素には旧情報を担う場合と新情報を担う場合があるということになる。²

本稿の目的は、右方転移要素が旧情報を担う場合と新情報を担う場合の右方転移文の派生過程を吟味し、右方転移要素が旧情報を担う右方転移文と新情報を担う右方転移文に対して異なる派生過程を仮定することで、右方転移文と情報構造の関連に説明を与えることができることを指摘することにある。

1. 2種類の右方転移文³

1.1. 新情報としての右方転移要素

高見(1995)、江口(2000)、綿貫(2012)では、右方転移要素は情報構造上の旧情報であるという従来の分析とは異なり、後置要素が情報構造上の新情報である場合があることを指摘している。⁴この点を、(2-4)を例に取り、考えてみることにする。

- (2) a. 明け方やっと生まれました、男の子が。
b. 太郎は花子に買ってやったよ、10カラットのダイヤの指輪を。
c. 私言ったの、結婚したいって。(高見 1995:236)
- (3) a. おい、見たぞ、おまえがあいつに車の陰で金を渡しているところを。
b. きこのう真夜中に電話がかかってきたんです、あなたと同じ名前を名のる人から。
(江口 2000:84/87)
- (4) 「夏期講座の打ち上げに行きました」と応答した後の発話
話し手 B: でも -、出るから、お金が。(綿貫 2012:144/145)

高見(1995)では、(i) 先行文脈から復元可能な要素、(ii) 発話の状況から容易に理解される要素が右方転移される場合に加えて、(iii) 先行文脈からも発話の状況からも復元可能ではない要素が右方転移要素として許容されることが指摘されている。(2)は、高見(1995:232, 236)によれば、先行文

² 厳密に言うならば、高見(1995)では右方転移文に対する情報構造上の「情報の重要度の高さ」に基づく分析が提案されている。

³ 第1節での右方転移要素の談話機能に基づく2種類の右方転移文(旧情報あるいは新情報としての右方転移要素)に関する先行研究(高見(1995)、江口(2000)、綿貫(2012)、中川・浅尾・長屋(2007)、Nakagawa, Asao and Nagaya(2008))の分析の詳細に関しては、木村(2013)を参照のこと。

⁴ 「今年こそ」は、やめよう。今年こそ。(COCO塾Communication Competenceの電車内広告)の「今年こそ」も、とりたてて詞「こそ」の付加により、「今年こそ」が焦点(focus)要素であり、重要度の高い新情報であるように思われる。これは、新情報を担う要素が右方転移される可能性を示唆している。(田中秀和氏 (the University of York, UK)との個人談話による。)

脈なしで唐突に発話された文としても適格であり、右方転移要素は先行文脈や発話の状況からは復元できない場合である。さらに、久野(1978)が指摘するような、確認のための情報ではなく、また、文の主語や目的語という必須要素であるため、補足的な情報と言うことは難しく、重要度の高い情報であるとの指摘がなされている。また、江口(2000)では、久野(1978)や高見(1995)では取り上げられていない右方転移文が存在することが指摘されている。このタイプの右方転移文(3)は、意図的な語順操作で導かれる右方転移文であり、移動に基づき情報の重要度の高い新情報を担う要素が右方転移される構文であるとの分析が提案されている。⁵ 江口(2000:84/87)によれば、相手に脅しをかけるねらいでやんわりと言われた(3a)や聞いている相手に緊張感を引き起こす(3b)は、情報の重要度という観点で見た時に、前半部分より右方転移要素の方がむしろ重要度が高いと考えることのできる右方転移文であることが指摘されている。また、綿貫(2012)では、話し手の頭に最初に浮かぶ重要・緊急の情報が先に発話された結果、副次的な情報が後に発話されるという原理を提案する Simon(1989)の分析を支持し、後置される要素が文脈上解釈可能である場合と解釈不可能な場合があるとする分析を提案している。右方転移される要素が文脈上解釈可能である場合(聞き手指向)と解釈不可能な場合(話し手指向)があるとの分析が提案され、解釈不可能な情報が右方転移される場合、最も話したい・聞きたい情報を発話した結果として省略された(一旦焦点から外れてしまった)情報を後置することで、その情報を再焦点化し、話し手が自己の発話意図を充足させる機能があることが論じられている。綿貫(2012:145)によれば、(4)は話し手Aの発話「(夏講(夏期講座)の打ち上げに)行ったんですか」に話し手Bが「えー、(夏講(夏期講座)の打ち上げに)行きました」と応答した後に「行った」理由を述べている発話で、ここでの右方転移要素「お金が」は文脈からは解釈不可能な情報(not-context-construable)であることが指摘されている。このように、右方転移文には新情報を担う右方転移要素が存在することになる。

1.2. 右方転移文とポーズの有無

中川・浅尾・長屋(2007)では、英語のwh分裂文との平行性の観点から、日本語の右方転移文を捉えなおす研究が展開され、既出の情報や周囲の状況から復元可能な情報を表す要素が後置されている場合にはポーズが置かれないのが自然であり、新しい情報を表す要素が後置されている場合にはポーズを置かなければならないことが指摘されている。

⁵ 江口(2000)は、久野(1978)が主張する右方転移文をタイプ1とし、談話的省略に基づき生成され、旧情報が後置される場合であり、高見(1995)が主張する右方転移文をタイプ2とし、構文法的省略に基づき導かれる後置文で、新情報が後置される場合であると分析する。タイプ1とタイプ2は基底で生成され、意図的な語順操作で導かれる第3のタイプは情報の重要度の高い新情報を担う要素が移動に基づき後置されるとの分析が提案されている。

- (5) a. (= (1b)) 本当にダメだね、君は。
 b. (= (2b)) 太郎は花子に買ってやったよ、10カラットのダイヤの指輪を。
 c. (= (3a)) おい、見たぞ、おまえがあいつに車の陰で金を渡しているところを。

中川・浅尾・長屋(2007)によれば、(5a)では前半部分と右方転移要素の間にポーズが置かれないのが自然であり、これとは対照的に、(5b, c)では右方転移要素が重要な情報である限り前半部分と右方転移要素の間にポーズが置かれなければならない。

2種類の右方転移文の特性は、中川・浅尾・長屋(2007)の観察に基づき、以下の(6)のように、まとまることができる。

(6) I. ポーズが置かれない右方転移文：

- a. 右方転移要素に強勢を置くことができない。(??かわいいねこれは。)
 b. 質問の答えにならない。(それで誰が走って逃げたの？#走って逃げたよ
次郎 が は。)
 c. 総記のガ；対比のハは許されない。(※いちばん走るのが速いよ次郎が。
 (総記のガ)，#おいしいですこれは。(対比のハの意味がなくなる))

II. ポーズが置かれる右方転移文：

- a. 右方転移要素に強勢を置くことができる。(いちばん走るのが速いよ、次郎が。
 おいしいです、これは。)
 b. 質問の答えになる。(山田さん、いつ旅行に行ったの？どこに？)
 c. 総記のガ；対比のハが許される。(いちばん走るのが速いよ、次郎が。(総記のガ)
 (あれはまずいけど)これはおいしいです。(対比のハ))

ポーズが置かれない右方転移文では、i) 後置要素には強勢を置くことができない、ii) 質問の答えになれない、iii) 総記のガ(焦点)を後置することはできない、iv) 対比のハを後置することはできない。このことから、(6I)の右方転移要素を情報構造上の旧情報を担っている要素であると特徴づけることができる。他方、ポーズが置かれる右方転移文では、i) 後置要素に強勢を置くことができる、ii) 疑問の焦点や質問の答えを後置することができる、iii) 総記のガや対比のハを後置することができる。この特性から、(6II)の右方転移要素を新情報を担う要素であると特徴づけることができる。ここでの考察が正しいとするならば、右方転移文には2種類の異なるタイプが存在することになる。

1.3. 右方転移文とイントネーション

Nakagawa, Asao and Nagaya (2008:22) では、右方転移文の情報構造は前置要素と後置要素の音声

的特徴に基づき2種類に分類することができ、i)前置要素と後置要素が1つのイントネーション曲線からなり、前置要素にのみピッチと音量の上昇が見られるタイプの右方転移文(後置要素下降型)の後置要素は旧情報であり、ii)前置要素と後置要素がそれぞれ独立のイントネーション曲線からなり、それぞれにピッチと音量の上昇が見られるタイプの右方転移文(後置要素山型)の後置要素は新情報であることが指摘されている。⁶

(7) 後置要素下降型：

- a. 本当に だめだね 君は。
- b. やって あげましょう 私が。

後置要素山型：

- a. あたし言ったの 結婚したいって。(cf. 高見 1995: 232)
- b. 山田さんって お土産に 何を買ったの？ 誰に？

(Nakagawa, Asao and Nagaya 2008:6)

旧情報を伝える後置要素を伴う右方転移文(後置要素下降型)では、ポーズが置かれることがなく、単一の音調(a single coherent contour)で、主節にのみピッチの高み(pitch and intensity rise only in the main clause)が置かれる。他方、新情報を伝える後置要素を伴う右方転移文(後置要素山型)では、前置要素と後置要素の間にポーズを伴う二つの異なる音調(two distinct coherent contours)で構成され、後置要素と主節の両方にピッチの高みが見られる。

また、このような観点から、(8,9)の話し手Aに対する発話Bと発話B'の違いに説明を与えることができる。

- (8) A: あのお寿司屋さん 美味しい？ (「米」は新情報)
- B: ??美味しいよ 米は。(後置要素下降型)
- B': 美味しいよ 米は。(後置要素山型)

- (9) A: 僕 米 嫌い。(「米」は旧情報)
- B: 美味しいよ 米は。(後置要素下降型)
- B': ?美味しいよ 米は。(後置要素山型)

(Nakagawa, Asao and Nagaya. 2008:7)

⁶ Astruc (2004) では、i) カタロニア語 (Catalan) の右方転移要素に強勢が置かれる (accented) 可能性及び ii) 右方転移により2つの独立した単位 (independent units) が必ず形成される可能性が議論され、必ずしも独立した単位が形成されるわけではないこと及び右方転移要素は強勢が置かれない (deaccented) のが通常ではあるが置かれる場合もあることが指摘され、韻律上の句節法 (prosodic phrasing) とイントネーション (intonation) に対する情報構造 (information structure) の影響に基づき、これらの違いに説明を与えることができると論じられている。

(8)の話し手AとBとの発話では「米」は新情報であり、(8B')のように前半部分と後置要素のそれぞれに音調曲線が生じる後置要素山型でなければならない。(8B)のようにピッチの高みが置かれない後置要素下降型は許されない。他方、(9)の「米」は旧情報である。文法性は(8)とは逆で、後置要素にピッチの高みが置かれない後置要素下降型でなければならない。(9B')のように後置要素山型で強勢が置かれることは許されないのである。

2. 右方転移文の派生

第1節では、右方転移文の右方転移要素には旧情報を担う場合と新情報を担う場合の2種類あり、明確に峻別されなければならない構文であることを、先行研究に基づき明らかにした。第2節では、右方転移文の派生方法に関する分析、すなわち、「左方移動に基づく分析」と「移動と削除に基づく分析」を概観する。⁷

2.1. 左方移動に基づく分析

黒木(2006)は、従来、右方移動(Haraguchi 1973, Simon 1989)が関与すると分析された右方転移文の派生は動詞句前置/残余句移動等の左方移動の一例として分析されるべきであると主張する。この分析が右方転移文で観察されている島の効果が示される等の移動に課される諸特性を説明するだけでなく、⁸ 作用域解釈(scope interpretation)や束縛現象(binding phenomena)等の事実に基づき、その妥当性が支持され、さらに、この分析は可能な移動操作は左方移動のみとする反対称的統語理論(antisymmetry of syntax (Kayne 1994))と合致する分析であることが論じられている。黒木(2006)の分析を、次の(10)を例に取り、概観する。

- (10) a. [_{TP} 太郎が_i 愛している(よ)], 花子を_i
b. [_{TP} e_i 花子を愛している(よ)], 太郎が_i (黒木 2006:214)

黒木によれば、(10a, b)では目的語と主語がそれぞれ右方移動されているように見えるが、実際は

⁷ 右方転移文に対する左方移動分析と削除と移動に基づく分析及び右方転移文の諸特性の詳細に関しては、木村(2012)を参照のこと。

⁸ Takano(2010)は、Ross(1986/1967), Rodman(1997/1974), 久野(1978), Simon(1989), Murayama(1999), Tanaka(2001), Abe(2004), 黒木(2006), Fukutomi(2006), Baker(2007)等とは異なり、日本語の右方転移は音声形式部門で取り扱われるべき現象であり、統語的移動操作に係わるトルコ語とは異なり、日本語の右方転移では島の条件効果(island effects)が観察されないとの主張がなされている。しかしながら、複合名詞句を構成する関係詞節(relative clauses)や同格節(appositive complement clauses)からの抜き出しを禁じる複合名詞句制約(complex noun phrase constraint), 等位構造制約(coordinate structure constraint), 副詞節(adverbial clauses)からの取り出しを禁止する付加詞条件(adjunct condition)に右方転移文が従うということが先行研究において指摘されている。ただし、Simon(1989)では、文主語制約(sentential subject constraint), 等位構造制約, Wh島の条件(Wh-island constraint)の効果が観察されないことが指摘されている。

そうではなく、(10a)は目的語「花子を」は主題化 (topicalization) と残余句 TP 移動で導かれ、(10b)は動詞句前置 (VP preposing) が関与する構文であり、右方移動は関与しない構文である。⁹ ここで、右方転移文の詳細な派生を概観することにする。(10a, b)の分析は、次の(11, 12)に示されているように、様態標識「よ」が様態句 (ModalP: MdP) の主要部として現われ (cf. Endo 1996),¹⁰ この指定部 (specifier) に任意の TP/VP が左方移動するとの分析が提案されている。

(11) 主語「右方」転移文

- a. [_{TP} 太郎が [_{VP} 花子を_i [愛している e_i]]]
- b. [_{MdP} [_{VP} 花子を_i [愛している e_i]]]_j [_{MdP} よ [_{TP} 太郎が_j]]]

(12) 目的語「右方」転移文

- a. [_{TopP} 花子を_i [_{TP} 太郎が [_{VP} t_i [愛している e_i]]]]]
- b. [_{MdP} [_{TP} 太郎が [_{VP} t_i [愛している e_i]]]]]_j [_{MdP} よ [_{TP} 花子を_j]]] (黒木 2006:219)

主語「右方」転移文では、(11a)に示されているように、目的語「花子を」が顕在的に動詞句指定辞に移動し、その後、(11b)に見られるように、動詞句 [_{VP} 花子を_i [愛している e_i]] が様態句指定部に移動する。他方、目的語「右方」転移文では、(12a)に示されているように、対格名詞句「花子を」が主題化で話題化句指定部に移動し、その後、残余句 [_{TP} 太郎が [_{VP} t_i [愛している e_i]]] が様態句指定辞に移動する。このように、黒木 (2006) では右方転移文に対して単節構造に基づく左方移動分析が提案されている。

2.2. 移動と削除に基づく分析

Abe (2004) は、句構造規則の制限的な理論の構築 (cf. Fukui 1993, Kayne 1994) の観点で、右方転移文の後置要素の生成過程が問題となると主張する。制限的な句構造に関する理論では、右方付加 (rightward adjunction) が主要部後置型言語では許されない (Fukui 1993), あるいは、非対称的な階

⁹ 右方転移文には、Tanaka (2001) はかき混ぜ (scrambling) が関与するとの分析を提案しているが、黒木 (2006: 214–16) は、右方転移文は、① i) 主文現象である、ii) 疑問詞の転移ができない、iii) radical reconstruction 効果は観察されない等の統語特性を示すことから、かき混ぜではない、② 数量詞作用域 (quantifier scope) の多義的解釈や上方制限 (upward-boundedness) に従わないことから、右方移動が関与していない、③ 多重節構造を用いる削除分析には概念的な問題があるので、単節構造を仮定すべきであると主張する。また、Murayama (1999) では、sika-nai 構文における現象に基づき、再構築 (reconstruction) がかき混ぜと異なり、wh 移動や話題化と同様に、右方転移では観察されないことから、素性に駆動される (feature-driven) 移動であり、また、島の条件効果が観察されることから、右方転移は統語的移動が関わる現象であるとの分析が提案されている。

¹⁰ 右方転移が主節現象であることは、Haraguchi (1973), Saito (1985), Endo (1996), Fukutomi (2006), 黒木 (2006) 等で指摘されている。Emonds (1976:34) は右方転移は根変形 (root transformation) であり、文法性は右方転移された要素が主節の節点 S に直接支配されているかどうかによるとしている。一方、Ross (1986/1967), Rodman (1997/1974), Gundel (1977/1974) は右方転移が従属節内であっても適用されることを指摘している。

層関係が語順を決定するという理論から右方移動は普遍的に禁じられている (Kayne 1994) と考えられているので、制限的な付加操作に係る理論及び非対称的な句構造理論の観点から、右方転移文の後置要素の生成過程及びその生じる位置がきわめて重要な問題であることが指摘されている。

右方転移文は、Abe (2004) では削除規則の適用により導かれる構文であるとの分析が提案されている。¹¹ この分析を、次の (13) の派生 (14) を例にとり、考えてみることにする。

(13) ジョンは批判した、メアリーを。

(14) a. ジョンは e_i 批判した、メアリーを $_i$ [ジョンは e_i 批判した]

(leftward movement of object)

b. ジョンは e_i 批判した、メアリーを $_i$ [e]

(deletion under identity) (Abe 2004:56)

(14a, b) の派生において、目的語「メアリーを」が2番目の節頭 (the top of the second clause) に左方移動され、この節の残りの要素 (the rest of this clause) が最初の節との同一性のもとで削除される (deleted under identity with the first clause)。Abe (2004) では、右方転移文の前半部分も後置要素も共に省略文であり、前半部分の主語をはっきりさせるために文末で繰り返す、あるいは、確認あるいは補足のために後置要素が付加されると主張する久野 (1978) の分析の可能な具現化 (a plausible instantiation) であるとし、2つの節では同じ命題が繰り返されているので、等位構造 (conjunction) であると思なすことはできないと主張する。すなわち、2つの節の関係を節の繰り返し (clause-repetition) であると思なすのが適切であり、複合節構造 (complex clause structure) を右方転移文は持っているとして主張する。2番目の節で左方移動される句は、演算子移動が適用されて導かれるとの分析が提案されている。¹² 本稿では、このような「節の繰り返し」に基づく分析を移動と削除に基

¹¹ Abe (2004) では、日本語の右方転移文の派生過程として、i) 右方移動分析、ii) 二重移動分析、iii) 削除分析を比較し、数量詞の作用域の相互作用 (quantifier scope interaction) 及び島の条件効果と残余代名詞 (resumptive pronouns) の観点から、削除分析が優れていることが論じられている。そして、かきませ (scrambling) のような移動操作ではなく、話題化や焦点化 (focalization) のような演算子移動 (operator movement) が関わっているとの分析が提案されている。

¹² 削除規則と移動規則が適用され、省略文である右方転移要素が導かれるとする分析には、かきませ (cf. Saito 1985) とは異なり、前位修飾語の節や限定詞の属格名詞句の右方転移が許され、この点が問題となる。Merchant (2001:133) では、左枝条件への違反 (a left-branch violation) に加えて、主語条件 (subject island) という strong island から whose の sluicing が可能であることが指摘されている。

(i) The police said that finding someone's car took all morning, but I can't remember **whose**.
その一方で、顕在的な WH 移動が適用されると非文法的となる。

(ii) ***Whose** did the police say that finding (**his**_i) car took all morning? (Merchant 2001:133)

Merchant (2001:134) によれば、英語の whose は、次の (iii) で示されているように、省略された名詞句補部 (an elliptical NP complement) を認可することができる。

(iii) Abby's car is parked in the driveway, but **whose** is parked on the lawn?

づく分析と呼ぶことにする。¹³

3. 右方転移文に対する単節構造 / 複合節構造と移動に基づく分析

中川・浅尾・長屋 (2007) や Nakagawa, Asao and Nagaya (2008) では、第2節で見たように、右方転移要素が旧情報である場合 (ポーズが置かれない ; 後置要素下降型) と新情報である場合 (ポーズが置かれる ; 後置要素山型) があり、2種類の右方転移文が存在することが指摘されている。しかしながら、右方転移文に2種類あることは指摘されているが、何故、右方転移要素が旧情報である場合と新情報である場合があるのかに関しては詳細な議論が欠けているように思われる。本節では、右方転移要素が旧情報である場合と新情報である場合を右方転移文の派生という観点から考察し、ポーズが置かれない後置要素下降型で転移要素が旧情報である右方転移文に対して左方移動に基づく移動分析を、ポーズが置かれる後置要素山型で転移要素が新情報である右方転移文に対して文的部分的繰り返しと削除によって導かれるとする移動と削除に基づく分析を提案する。すなわち、本稿では、仮説 (15) を仮定した分析 (16) を提案し、その妥当性を検討する。¹⁴

(15) 右方転移文の構造には単節構造と複合節構造の2種類が存在し、いずれの場合にも移動のメカニズムが関わる。

(16) a. 右方転移要素の前にポーズを伴わない場合 (後置要素下降型) は単節構造をしていて、移動規則の適用を受けて導かれる。

このような現象から、whoseが[_{DP} whose [_{NP} e]]の構造をしていると分析することが一つの可能性として示唆されている。日本語の属格名詞句の右方転移の分析として、名詞句削除 (NP-deletion) に基づく音形を持たない空の名詞句を仮定する分析を田中 (2013) が提案している。また、Takahashi and Funakoshi (2012) は、名詞句の左枝抜き出し (left branch extraction) は非文法的だが、前置詞句の抜き出しは文法的であることを指摘している。No には構造的格 (属格) である no と接続 (linker) のための no があるとする Watanabe (2010) の分析を仮定し、名詞句の場合の KP が前者で、前置詞句の場合が後者であるとの分析が提案されている。Simon (1989:163) は、主要部移動 (head movement) の禁止という純粋な統語的な制約で排除される現象として、属格名詞句 (possessor NP) と属格名詞句に修飾される名詞句 (possessee NP) の後置の文法性の違いをあげている。なお、属格名詞句の右方転移と移動が係わらないとする主要部制限 (Head Restriction) に基づく分析に関しては、Sells (1999) や Baker (2007) を参照のこと。

¹³ Takita (2011) は、否定極性表現 (negative polarity item: NPI) や数量詞が含まれる右方転移文において、-sika NPIs や数量詞が伴う右方転移文の空所 (gaps) が a full-fledged phrase として具現されることは許されるが代名詞は許されないことを指摘し、「繰り返し (repetition) + 削除 (deletion)」に基づく分析を提案している。

¹⁴ Simon (1989) は、右方転移文にはポーズを伴う場合 (pause type of postposing) と伴わない場合 (no-pause type of postposing) があり、前者は後置 (postposing)、後者は付加 (addition) として区別されるべきであると主張する。ポーズを伴わない右方転移文を付け足し (afterthoughts) とすることはできず、移動に基づく分析が可能なオプションであると論じられている。Simon (1989) によれば、ポーズを伴う場合は後置要素を付け足しと見なすことができ、ポーズを伴わない場合は重要で緊急な情報を話者が最初に言語化した場合で「重要な情報を最初に」の原理 (Important Information First (IIF) principle) に従っていると論じている。

る様態句 cf. Endo 1996, 黒木 2006) の指定辞に移動することになる。この移動は同一文内での移動であり、これにより、ポーズが置かれることがなく、単一の音調となることが導き出される。

他方、(17b, c) では、久野 (1978) や Abe (2004) が提案しているように、複合節構造をしていて、新情報を担っている転移要素「10カラットのダイヤの指輪」や「おまえがあいつに車の陰で金を渡しているところを」に焦点移動、すなわち、演算子移動が適用され、2番目の文の最初の文との共通する記号連鎖が削除されて導かれることになる。¹⁵ (17b, c) の基底構造は複合節構造であり、2番目の節において移動規則が適用される。これにより、ポーズが置かれ、2つの独立した音調で構成されることが導かれることになる。

(19) a. 太郎は花子に買ってやったよ, [10カラットのダイヤの指輪を]_i 太郎は花子に t_i
 買ってやったよ

b. おい, 見たぞ, [おまえがあいつに車の陰で金を渡しているところを]_i おい, t_i 見たぞ

(19a) では新情報である右方転移要素「10カラットのダイヤの指輪を」に演算子移動が適用され、残された残余句「太郎は花子に買ってやったよ」が最初の文との同一性から削除される。(19b) においても (19a) と同様に、新情報である右方転移要素「おまえがあいつに車の陰で金を渡しているところを」に演算子移動が適用され、残余句「おい, 見たぞ」が最初の文との同一性に基づき、削除される。このような派生過程を経て、(17b, c) が導かれることになる。

4. まとめ

本稿では、右方転移文の右方転移要素が旧情報を担う場合 (Gundel (1977/1974), 久野 (1978), Rodman (1997/1974), Huddleston and Pullum (2002)) と新情報を担う場合 (高見 (1995), 江口 (2000), Astruc (2004), 中川・浅尾・長屋 (2007), Nakagawa, Asao and Nagaya (2008), 綿貫 (2012)) の2種類あるとする分析を踏まえ、右方転移文の派生過程を吟味し、右方転移要素が旧情報を担う右方転移文に対しては単節構造に基づく左方移動分析、右方転移要素が新情報を担う右方転移文に対しては複合節構造に基づく削除と移動に基づく分析という異なる派生過程を仮定することで、右方転移文と情報構造の関連に説明を与えることができるとする分析を提案した。この分析の帰結として、ポーズの有無及びイントネーションの違いが導き出されることを論じた。

¹⁵ 右方転移文の派生の詳細は、Abe (2004) を参照のこと。

参考文献

- Abe, Jun. 2004. "On Directionality of Movement: A Case of Japanese Right Dislocation," *Proceedings of the 58th Conference*, 54–61, Tohoku English Literary Society.
- Astruc, Lluisa. 2004. "Right-Dislocations: Influence of Information Structure on Prosodic Phrasing and Intonation," *Cambridge Occasional Papers in Linguistics* 1, 1–14.
- Baker, Brian D. 2007. *Japanese Adnominal Postposing and an Argument against Movement*, a senior honors thesis, Ohio State University.
- 江口 巧 2000. 「日本語の後置文—情報提示の方略—」『言語文化論究12』81–92, 九州大学大学院言語文化研究院.
- Emonds, Joseph. E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*, New York: Academic Press.
- Endo, Yoshio. 1996. "Right Dislocation," *Formal Approaches to Japanese Linguistics 2* (MIT Working Papers in Linguistics29), 1–20.
- Fukutomi, Yasuyuki. 2006. 「An Antisymmetric Analysis of Japanese Right Dislocation」『言葉の絆 (藤原保明博士還暦記念論文集)』, 312–325, 開拓社.
- Gundel, Jeanette K. 1974. *Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*, Doctoral Dissertation, Ohio State University (Reproduced by the Indiana University Linguistics Club, 1977).
- Haraguchi, Shosuke. 1973. "Remarks on Dislocation in Japanese," ms., MIT.
- Huddleston, Rodney, and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kayne, Richard. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*, Cambridge, MA: MIT Press.
- 木村宣美 2012. 「日本語の右方転移：移動分析と削除分析」弘前大学人文学部『人文社会論叢 (人文科学篇)』第28号, 1–11.
- 木村宣美 2013. 「右方転移と談話機能」『人文社会論叢 (人文科学篇)』第30号, 1–13.
- 久野 暲 1978. 『談話の文法』大修館書店.
- 黒木暁人 2006. 「日本語右方転移文の構造について：左方移動分析の観点から」*Scientific Approaches to Language* 5, 213–231, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- Merchant, Jason. 2001. *The Syntax of Silence: Sluicing, Islands, and the Theory of Ellipsis*, New York: Oxford University Press.
- Murayama, Kazuto. 1999. 「An Argument for Japanese Right Dislocation as a Feature-Driven Movement」『言語科学研究』第5号 (神田外語大学), 45–62.
- 中川奈津子・浅尾仁彦・長屋尚典 2007. 「日本語における右方転移構文と分裂文の機能」日本言語学会第135回大会ポスター発表.
- Nakagawa, Natsuko, Asao, Yoshihiko, and Naonori Nagaya. 2008. "Information Structure and Intonation of Right-Dislocation Sentences in Japanese," *Kyoto University Linguistic Research* 27, 1–22.
- Rodman, Robert. 1997. "On Left Dislocation," *Materials on Left Dislocation*, 31–54, edited by Elena Anagnostopoulou, Henk van Riemsdijk, and Frans Zwarts, Amsterdam: John Benjamins. (*Papers in Linguistics* 7, 437–466, 1974)
- Ross, John R. 1986. *Infinite Syntax!* New Jersey: Ablex Publishing Corporation. (*Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral Dissertation, MIT, 1967)
- Saito, Mamoru. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*, Doctoral Dissertation, MIT.
- Sells, Peter. 1999. "Postposing in Japanese." [<http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.79.5863&rep=rep1&type=pdf>]

- Simon, Mutsuko Endo. 1989. *An Analysis of the Postposing Construction in Japanese*, Doctoral Dissertation, University of Michigan.
- Takahashi, Masahiko and Kenshi Funakoshi. 2012. "On PP Left Branch Extraction in Japanese," *Penn Linguistics Colloquium* 36 abstract.
- 高見健一 1995.『機能的構文論による日英語比較—受身文、後置文の分析—』くろしお出版.
- Takano, Yuji. 2010. "A Comparative Approach to Japanese Postposing," an unpublished paper, Kinjo Gakuin University.
- Takita, Kesuke. 2011. "Argument Ellipsis in Japanese Right Dislocation," *Japanese/Korean Linguistics* 18, 380–391.
- Tanaka, Hidekazu. 2001. "Right-Dislocation as Scrambling," *Journal of Linguistics* 37, 551–579.
- 田中秀和 2013.「Right-Dislocation, Ellipsis, and Island Repair」南山大学言語学コロキウム (配布資料ハンドアウト).
- Watanabe, Akira. 2010. "Notes on Nominal Ellipsis and the Nature of *no* and Classifiers in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 19, 61–74.
- 綿貫啓子 2006.「日本語の後置文：左方移動文との相違」*Scientific Approaches to Language* 5, 251–268, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- 綿貫啓子 2012.「後置文の意味機能から探る話し言葉の生成のしくみ」*Scientific Approaches to Language* 11, 137–158, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- Yamashita, Hideaki. 2010. "What Makes Right Dislocation of *Wh*-Phrases in (Tokyo) Japanese (Im) Possible?" *WCCFL 28 Online Proceedings (Prosody Poster Session)*. [[https:// sites.google.com/site/wccfl28pro/home](https://sites.google.com/site/wccfl28pro/home)]
- Yamashita, Hideaki. 2011. "An (other) Argument for the "Repetition" Analysis of Japanese Right Dislocation: Evidence from the Distribution of Thematic Topic *-wa*," *Japanese/Korean Linguistics* 18, 410–422.